



# 新十津川望郷会 会報 第六号

## 第六号の発行にあたつて

新十津川望郷会会长  
山本敬一郎

さわやかな初夏を迎え、会員の皆様には益々お元気でお過ごしのことと思います。

「望郷会報」も皆様のあたたかいご支援とご協力により、第六号を発行することができました。

全国的に地方の市町村は高齢化と人口の減少が進んでいますが、新十津川町を含む中空知地域も例外ではありません。

自治体ばかりでなく、住民の皆さんのが進んで町おこしに取り組んで居ますが、私たちも心から声援を送りたいと思いま

全国各地で活躍して居られる会員の皆さんからも、アイ

ディアや成果をあげている事例の紹介、ご提案などを会報にご発表頂くことができれば、大変素晴らしいことではないかと思いますので、よろしくお願いします。

ことしも、望郷会総会のあ

と開町記念式に参列し、引き続いて町内の有志の方々も参加する懇談会の後、バスによる町内見学が予定されていましたが、ふるさとの近況を知るいい機会ですので、沢山の方のご参加をお願いします。

今回もたくさんの方の原稿をお寄せ頂き、ありがとうございます。

助役として十二年間町政の執行に携わつてまいりましたが、この間においてハード面の基礎

新十津川町長  
小畠莊一

深緑の季節を迎える北海道にとりましては一年をとおし一番過ごしやすく、花々が競う美しい時期となりました。望郷会員の皆様には、日頃から新十津川町にご支援を賜り心からお礼申し上げます。

今年四月に行なわれました統一地方選挙におきまして、三期十二年の長きにわたり新十津川町長を努められた安藤君明様から町政の舵取り役をお引き受けすることとなりました。もとより微力ではございますが、全力で職務を全うする所存でござります。

新十津川町の発展に努めてまいります。最後になりましたが、皆様のご健康とご発展を心からご祈念申し上げます。

## 望郷会報6号の 発刊にあたり

整備はほぼ完了したと考えております。今後は、ソフト事業を重視し、人づくりと豊かな自然を守る、人と自然に優しいマチづくり、産業の振興、安心して暮らせる健康と福祉のマチづくり、町民参加のマチづくりの四点を重点施策として推進してまいります。人づくりや町民の健康づくりは長期的に取り組まなければならず、合わせて農業経営者の高齢化や後継者不足が顕著となつてきている現在、その問題解決策を更に検討し実施に踏み切らなければなりません。郷土愛に満ち溢れ開拓精神旺盛にして新十津川町を築いてこられた先人の意思を継承しつつ、今後も町民の皆様とともに邁進することをお約束いたします。

今後とも望郷会員皆様のご支援をいただきながら新十津川町の発展に努めてまいります。最後になりましたが、皆様のご健康とご発展を心からご祈念申し上げます。

# 平成14年度新十津川望郷会総会

平成14年6月20日午前9時30分、新十津川町農村環境改善センターにおいて平成14年度新十津川望郷会総会が開催されました。総会には、会員36名が出席。山本敬一郎望郷会長のあいさつに続き、安藤君明新十津川町長が歓迎のあいさつを述べました。

議事に入り、承認事項として議案第1号平成13年度事業報告、議案第2号平成13年度決算報告、議案第4号会計監査報告がなされ承認されました。引き続き議決事項として議案第5号会則の改正が可決、議案第6号役員改選が行なわれました（会報最終項に掲載）。議案第7・8号平成14年度事業計画案並びに収支予算案が可決されました。総会終了後、午前10時から戦没者・開拓物故功労者・消防殉職者の追悼式が行なわれ、全員で黙祷を捧げたあと、安藤君明新十津川町長が式辞を、四釜隆遺族会長、山香靖時消防団長らが追悼の辞を述べました。その後、戦没者、開拓物故功労者、消防殉職者に対し、献花が行なわれました。また、午前11時からの開町112年記念式典では、町民の代表らが祭壇に花束を捧げ、全員で町民憲章を朗読。続いて小畠莊一新十津川町助役による告諭奉読、谷口榮新十津川町収入役による碑文朗読を行なわれました。

来賓として竹内輝明十津川村助役から祝辞を賜り、山本敬一郎新十津川望郷会長の万歳三唱で式典は締めくくられました。

平成14年度の新十津川町功労表彰者（自治功労）として次の方々に表彰状が手渡されました。葛西光晴さん、原口邦彦さん

また、60年以上新十津川町に在住する88歳以上の方々に対し、開拓功労者として感謝状が手渡されました。永田スミ子さん、故角島チヨさん、倉田源次郎さん、今野千代さん、山本俊男さん、湯浅かめのさん、淺川晴次さん、富久尾静さん、笹木ハルさん、坂下スガさん、富田五一さん、岡部センさん、勢藤政雄さん、中村糸さん、浅野ハルさん、佐藤作善さん、山本スギさん

## 新十津川望郷会総会



## 池田村の 「生きがい焼」を訪ねて



新十津川望郷会会長

陶芸の施設も在職中に設置されたもので、設備も整つて居り、作品の陳列棚には見事な作品が並んでいた。



前前  
吉野会々長

でなくとも「おのらの会」の会員になれるからと吉野会々員にいれてもらう。

新十津川郷友会によせて

昨年の秋、十勝の池田町にあ  
る福祉施設「生きがいセンタ」  
を視察させて頂く機会があつた。  
広くゆつたりとした陶芸の作  
業場では三十人ぐらいの高齢者  
が熱心に作品を作成していたが、  
その中に偶然わが新十津川望郷

作品には制作者の氏名とれた  
んがつけられている。どれも郷  
土色豊かなものばかりで、ねだ  
んも手頃である。

町の中心から大分はずれていたのに、訪れる人が多いのだとうと思われた。

作品の一部は材料費に充てられ、制作者にも還元されるとのことであつた。

会の副会長である丸谷金保先生が居られた。

丸谷先生は、若くして池田町長に当選され改良された「ぶどう」栽培を奨励し、十勝ワインを特産物として売り出すことに成功するなどアイディア町長として知られた方である。

その後参議院議員としても活躍されたが、その日は大きな前掛けをして粘土に取り組んで居た。

クラブでは、自主的に清掃や整理整頓に協力して居り、ときには会食や一泊旅行なども楽しんで居られるようである。

活気にあふれた「生きがい焼」の皆さんの笑顔に送られてセンターアをあとにした。

クラブの会員は六十五歳以上  
ということだが、八十歳を超えた  
という丸谷先生は、今もリー  
ダーの一人として活躍されてい  
るようだ。

クラブの会員は六十五歳以上  
ということだが、八十歳を超え  
たという丸谷先生は、今もり一

身者が多かつたが、他府県からの人も結構いたように聞いている。

何年か経つて、前の故梅沢郷友会長のとき出された提案が、郷友会「五十年誌」の発刊であつ

は西徳富吉野に移住して来た。親は香川県高松の在の生まれ。移住当時は親共々六人家族で、大木の多い森林をきりひらいて開拓の仕事の日々であつたと聞いている。奈良県十津川村の出

合い談笑は尽きず、町の功労者と言われる大先輩を囲み、別室で二次会を催すことも何度かあつた記憶がある。そのような事などを、思い出させる懐かしい会であつた。

吉野小学校を出てからは学校：職場の関係もあり、滝川・砂川・札幌さらには旭川と転々としたが、結局は四十二歳で札幌に職場を決めて落ち着くことになる。札幌では新十津川町での大先輩、玉置正明様の手引きにより、同じ先輩の和久井政造様のサディションもあり、十津川村出身者

何年か経つて、前の故梅沢郷友会長のとき出された提案が、郷友会「五十年誌」の発刊であった。私も編集委員の一人に加えて頂き、先輩共々苦労をしたことは忘れられない事である。

「郷友会五十年のあゆみ」と題し、二年後の昭和六十年（一九八五）五月に漸く発刊の陽の目を見た時は、後で本を手にして感動したものである。発刊祝賀会に参加出来た事は、私の無上

の喜びであつた。編集に関わつたボランティアの方々に心から敬意を表すものである。今日もまた改めて五十年誌を手にして見て感慨深いものがある。ところで大先輩玉置正明様の後を受けて今日まで、長期間を吉野会の会長職までも勤めさせてもらひ、また短期間ながら郷友会の会長職までも、まったく無知に等しい若輩の私が勤めてこられたのは、周囲の皆様の力と暖かさが、心から感謝し御礼を申し上げま

す。特に吉野会の菅原清様を始めとして大江ふみえ様・森下勝義様・菅原愛子様・松尾博様・上中弘之様ほかの方々には、最後の挨拶もせざ退任し、改めてここにこの紙面をお借りし、お詫びを申し上げます。

最後に、「郷友会」傘下の吉野会・大和会・花月会・中央会の四団体が、町の中学校と同じく町出身者一体の、悠久不滅の「郷友会」に統合されることを念じつつペンを擱きます。会員各位のご健勝を祈ります。

また、ピンネの頂上に鋼鉄製の神社があつた。この神社は私の生家の近くに丸谷鍛冶屋さんが、あつて、そこのおじさんが、「これは、ピンネの頂上に置くんだよ」と言つて、犬小屋程度のものを作つていたのを知つていたので、大変懐かしく見たものだ。あの神社は、今も頂上にあるのだろうか。

が、何となく整つた姿をしていて安定感がある。

いささか手前味噌になるが、花月地区から見える姿が一番均整がとれていて、夫婦山とも言えよう。おまけに小さな子ども達が間にあつて家族構成になつているような気もする。



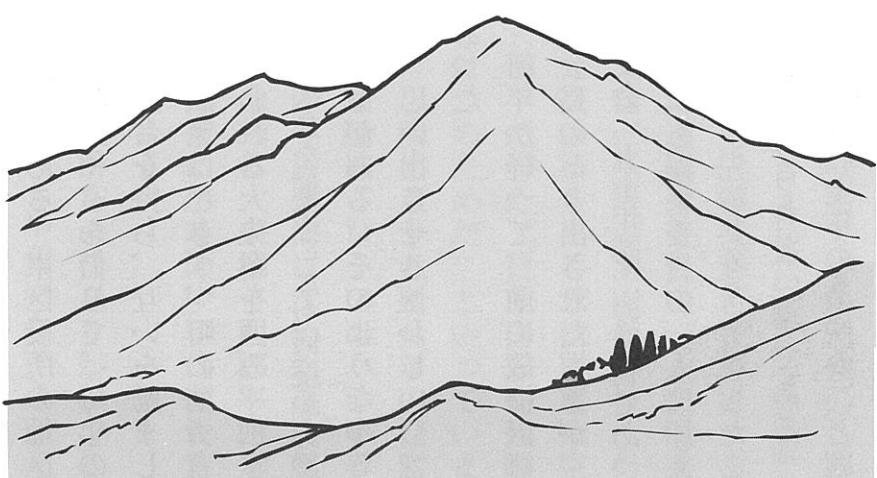
札幌花月会

## 郷土のシンボル ピンネシリ山

高 棚 政 義

ふる里に帰つて、まず目につくのは、ピンネの雄姿ではないだろうか。特別高い山ではない

昨年手稲山に登つた。北の方を見ると、ピンネを裏側から見



回

顧



札幌市さっぽろ大和会  
相談役

石本料詰

光陰矢の如し、と申されるが、私共のさっぽろ大和会も昨年の十月十九日「創立三十周年記念」を計画して「ふる里めぐり」を行い、大和小学校、郷土資料館、金滴酒造を訪問致し最後に創立記念会場の「サンヒルズ・サライ」で町長さん、母校の校長さん、PTA会長さん、その他町の有志の方々、会員と大勢のご来席を得て盛会のうちに終了致しました。尚、母校大和小学校では(土)の休校日にもかかわらず、校長さん先生と全校生が私達を迎えて下さった事、この紙面をお借りしてお礼を申し上げます。とくに全校生徒伝統の獅子神楽やYOSAKOI踊り、楽器演奏なども披露して下さつた事、最後に全員で校歌の合唱をしました。会員の中に当時を

思い起こし涙を流している方もいました。

どうか心身共に健康で次代を守る立派な生徒に育つてほしいと願つて母校をあとにしました。

「さっぽろ大和会」に創立より永く貢献して頂いた、今は生き初代会長清水金弘、二代目会長の佐川泰久さんを連れて行けなかつたのは心残りがありました。

昨今は「日進月歩」の時代、

少子化、市町村合併、学校統合と、大変な時勢です。私共、さっぽろ大和会も三十周年を節目として、会員の高齢化も進み時代に逆流する事なく、在札の吉野会、花月会、中央会が大同団結して一本化(仮・さっぽろ郷友会)にとの声が各々会より出ています。二十一世紀の朝明けにと近々旗揚げを願いたいです。

そして「新十津川望郷会」共々に、次代の為にも隆盛発展あらん事を心より祈念申し上げます。

擷筆

春の気流

透明な精靈のくちびるが開いて  
風がふかれてゆく

川辺のせせらぎの猫やなぎ

北国の春もすぐそこに

H一五・三・一七記



大和小学校児童歓迎



三十周年記念式典

## ふるさと大会に出席して



丸 谷 金 保

九月六日全国十津川郷友会故郷大会に出席するため関東郷友会に合流して、十津川郷に入る。少し横道に逸れるが関東郷友会の事に触れてみよう。明治三十年に発足して百年を経た今日、第一回の発会式の機関紙が今だは敬服した。その第一号で乾正彦法学博士の関東十津川郷友会の抱負と題する一文がある。

「思うに十津川郷友会の前途はまた十津川郷の前途なり。十津川郷の前途はまた日本の前途なり。日本の前途はまた世界の前途なり。日本の前途はまた世界の前途なり。否少なくともかの如き途なり。否少なくともかの如き大抱負、大覚悟なかるべからず。」

七日「昂の里」で（日本一の故郷帰り）と銘打つて「全国大

会」が始まった。奈良日日新聞の記事によると「全国に八支部ある郷友会から参加最高齢者となつた新宮郷友会の天野歌子さん（九十六）を筆頭に、元国務大臣前田政夫氏や元参議院議員の丸谷金保氏ら約三百五十人が出席した。この大会で、更谷村長は「歴史と伝統の原点にたつて自主独立を旨とし物質経済市場主義の時代から環境の時代、心の時代、ほんまもんを求める時代に一番大切なものは何か。

正に何かが残っている十津川村の時代が来たと確信し村を再興する事は歴史伝統のある十津川郷士の進む道であると確信しております」と挨拶されました。これなどは関東郷友会発足に当つての大抱負と共通する志が脈々と生きていて流石我が郷士十津川だと言う感を深くしました。

三日目はそれぞれの希望に分かれて世界遺産に申請中の吉野古道や瀬八丁など村内史跡巡り。私は分かれて小森にある我が家

の墓参にまいりました。

市町村合併問題で全国の自治体が播れております。私も三月二十一日から二十三日まで鹿児島県指宿市で「農業、観光振興と市町村合併について」という演題で講演を頼まれております。この問題については合併しないでやつていつた方が良い地域、合併した方が良い地域、スパイケースでそれぞれ結論は違つてくると思つておりますが、ただ一番心配なのは自分達の町は自分達で治めるんだと言う自らの精神が欠落しているという事です。国からの交付税が少なくなるからとか合併しなければ補助金が減額されるのではないかと言う視点でのみ論じられておりません」と挨拶されました。

いかと言つての論じられてゐることです。「憲法九十二条地方公共団体の組織及び運営に関する事項は地方自治の本旨に基づいて法律でこれを定める」この条文をしつかりと読み返すと、そこまで言つて地方自治の本旨に相通するものがありま

ります。つまり地方自治の本旨に基づかないものは、国会が法律でどの様に決めてもそれは憲法違反になると言う事です。では何が地方自治体の本旨とは何か。自分達の町のことは自分達で決める。簡単に言うとそういう事です。そして私は日本における地方自治の原点は正に十津川郷にあると思つております。

千年の昔から十津川郷は村人達の自治で運営されて来た地域社会です。何時の時代でも時の権力者に支配された事が無い地域。幕藩体制で日本国中がそれぞれ封建領主に支配された時代でもここだけはそれが無かつた。その代わりに村総代と言うような仕組みがあつて十津川郷に関する全ての行政、司法をみんなで相談して行つて来ました。十津川郷が守つてきた自治の精神。これは憲法のいわゆる地方自治の本旨に相通するものがあります。町村合併の問題も国から押しつけられるもので無く、住民

自らの判断で決めていくという  
気構えを、全国の市町村の住民  
が持つてもらいたいものです。

## 私のふるさと川の中



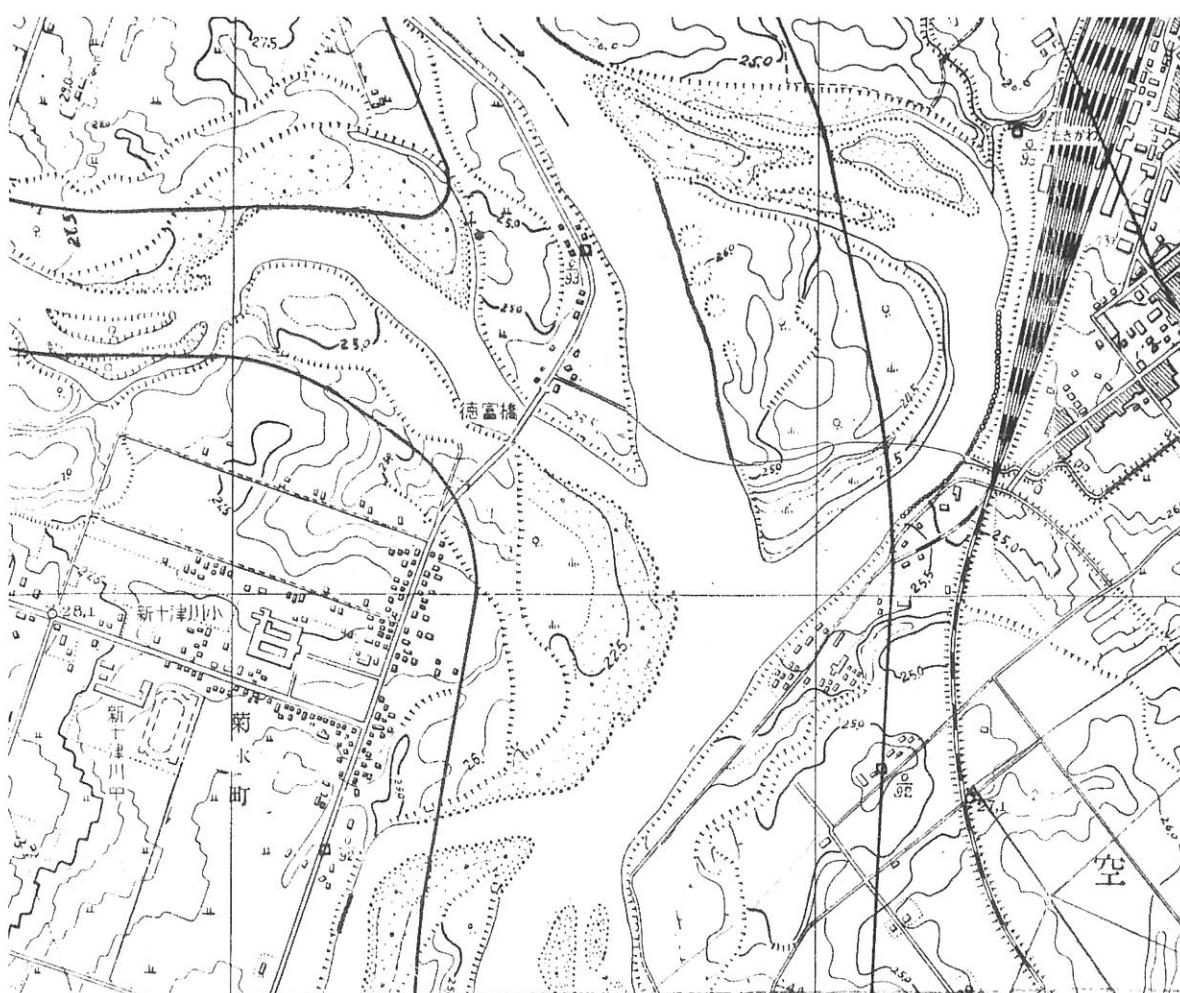
札幌郷友会事務局長  
岡田 功

私の生まれた所は上徳富七百  
七番地（元波止場部落）私の知  
る世帯は玉井家、滝沢家、川口  
家、鈴木家、有馬家、岡田功家、  
岡田家、立野家、上杉家、吉田  
家、藤屋家、吉岡家、伊藤家、  
藤井家、糸川家の十五世帯七十  
四名は記憶していますが今は元  
氣でお暮らしか。

思い出は春には石狩川にハイ  
ナワを夕方にセットして朝早く  
アカハラ採りに兄弟、友達と時  
間を合わせて、歌「シャンハイ  
帰りのリル」を口ずさみながら  
硬雪の上を歩いて、また山（惣）

進山）にスキーを滑りに友達数  
人とオニギリを腰につけて山ま  
で一時間、山では二時間程遊ん  
で来た道を帰った。夏には徳富  
川で水遊び、アユ、ヤツメ、川  
エビを採り、秋は石狩川でカニ  
釣りサケ採り、里見峠では山ブ  
ドウ採り、冬は百人一首他の家  
族と夜遅くまで。終わつた後に  
ミカン、モチをご馳走になつた  
思い出。

ふるさとは昭和二十五年の水  
害で河川改修が始まり、二十七  
年に父の転勤（食糧事務所勤務）  
で北空知の多度志町で高校卒業  
まで。後に新十津川ルーグダム  
建設工事、札幌開発建設部新十  
津川事業所に勤務することにな  
り、地元に帰り、秋祭りに野球  
を、弓道を神社で参加すること  
が出来ました。次回趣味（弓道  
四十年、囲碁三段）について書  
きたいと思います。



## 親から聞いた

### 十津川村の話(その3)



札幌市(望郷会理事)

玉堀光夫

私の母力ネ(旧姓藤森)は、明治二十五年十津川村七色で生れ、九歳のとき新十津川村橋本町に移住しています。母の自慢は、移住前に通っていた、和歌山県本宮小学校(現在も七色の子供は本宮市に通学している)、で当時の和歌山県知事から、学術優秀、親孝行につき、表彰されたことでした。移住後は新十津川小学校に通い、明治四十年三月、高等四年の第一回卒業生です。(明治時代の学制は、義務教育は四年、今の六年生は高等二年、中学二年は高等四年)。

母は、男三人、女三人の子を育て、私はその末つ子です。そ

の母から聞いた話を二つ書きま

す。當時十津川村までは一週間位は要したでしょう。十二歳の少年にとつては大変な道中であつたと想像されます。

一、藤森恒夫(母の弟)のこ

と。

私の叔父、藤森恒夫は、明治四十一年新十津川小学校から十津川村「文武館」(現奈良県立十津川高校)に進学しています。

「文武館」は、江戸時代京都御所の警備に当つた十津川郷士が、文武修業の必要性を痛感し、朝廷に学校の設立を願い出て、これを許され、元治元年(一三九

年前)に開校しています。当時

札幌には札幌中学(現札幌南高校)、北海中学(現北海高校)があつたのですが、祖母藤森なかは、長男藤森恒夫を「文武館」に進学させています。滝川駅を発つとき、本人の氏名と行き先の住所を書いた布を上着の胸と背中に縫い付けて、道中一緒になつた人はよろしくお願ひしますと書いて一人で行かせたのです。當時十津川村までは一週間一度も家に帰らせなかつたこと

など、正に明治の女の気概が感じられます。そして十津川村へ

るまでの五年間、一度も家に帰らせなかつたといいます。山深い十津川村で、親・姉・弟から離れての生活は、大変寂しかつたことでしょう。

「家に帰りたい」「皆に会いたい」と手紙が届きますが、祖母

なかは、「志を立てて文武館に行つたのに、ちょっとでも帰りたいとはどんなでもない、そんな弱くたいことでどうするか。」といつて怒つたそうです。私の母力ネは、「恒夫から手紙がくると母に叱られるので、便所で泣きながら読んだ」といつていました。

その祖母なかは、明治五年、我が国学制発布の年に生まれて

います。長男の恒夫を十津川村へ一人で行かせたこと、五年間一度も家に帰らせなかつたこと

など、正に明治の女の気概が感じられます。そして十津川村へ

入れがあつたことが想像されます。私も子供心に、祖母なかは、折り目正しい厳格な人であつたことが思い出されます。

私が少年の頃、叔父藤森恒夫から「文武館」での勉強のことなどを聞きましたが、「文武館」では、「国語・漢文・国史・書道・剣道に力を入れ、一番優秀な人は、当時の海軍兵学校へ行きました。次は第一高等学校(現東京大学)だった、日本海軍が強いためこのためだ」といつています。明治三十七、八年の日露戦争に勝ち、ロシアのバルチック艦隊を日本海に沈めた連合艦隊司令長官、東郷平八郎率いる

日本海軍に当時の少年は憧れたのでしよう。

又、親からの仕送りが少なく「学用品にも事欠いた」ことなども話していました。

二、西田信春のこと

西田信春は、一九〇七年(明治三十六年)新十津川村橋本町

に生まれています。父西田英太郎さんは、新十津川村第四代村長として村政に尽くされました。

西田信春は、大正四年三月新

十津川小学校を卒業後、札幌第一中学校（現札幌南高校）、第

一高等学校文科甲類（現東京大

学）に進み、昭和二年三月、東

京帝国大学文学部倫理学科を卒

業しています。卒業論文はドイツの哲学者「マックス・シェラー」

論でした。当時札幌一中、一高、

東大といえば天下の秀才が学び、

「末は博士か大臣か」といわれてきました。

第一高等学校在学中は、ボート部の選手として活躍し、東京大学時代は、社会科学研究部に属し、東京大学新人会にも参加しています。

私の叔母とみは、西田信春とは新十津川小学校の同級生で、「信春さんは、勉強がよくできて、体格もよく運動が得意だった。大変心がやさしく、親切で、皆から大変信頼されていた」。

といつていました。私の母カネも、「信春さんはしつかりした本当によい子だった」といついました。

西田信春は、東京大学卒業後、全日本鉄道従業員組合本部の書記となり労働運動の理論的指導者として、又、無産者新聞の編集部でも中心的存在として活躍しました。その後昭和七年二月

日本共産党九州地方委員長となり、党组织の再建に着手し、農民運動、労働運動を指導し、強固な党组织を確立しました。

昭和八年二月十日、久留米駅

で特高警察に逮捕され、十時間に及ぶ拷問の末翌十一日福岡署で死亡しています。（福岡県を中心）五〇八名が検挙された五一事件）三十歳の若さでした。

死亡の知らせは二十四年間も不明で、ご両親は、「信春は、どこかで生きている、いつかきっと戻ってくる」といつておられたそうです。戦後十三年たつてようやく「無名戦士之墓」に

合葬され、今は新十津川高台の墓地に眠っています。本当に若くして惜しい人を失つたものであります。作家小林多喜二も信春さんより十日前に獄死しています。

昭和六年の満州事変に始まり、日中戦争、太平洋戦争へと続く暗い時代の始まりでもあつたのです。

新十津川出身者では、十津川村永井の出身で、東京法学院（現中央大学法学部）を卒業し、東武は、北海タイムス社（現北海道新聞）を創立、立憲政友会に属し、衆議院議員当選十

回、数々の要職を歴任しました。新十津川出身者では東武以外にも、政、官、業、農教、芸術、医、芸能等各界で活躍した人や、現在も活躍中の多くの人材を輩

いましたが、「古稀」を過ぎましたが、自分の子や孫に、祖先のこと、自分の子供のこと、戦中・戦後の混乱した時代のことなどを話しておかなければと思つてしています。

私も、「古稀」を過ぎましたが、自分の子や孫に、祖先のこと、自分の子供のこと、戦中・戦後の混乱した時代のことなどを話しておかなければと思つてています。

望郷会会員の皆さんも、それぞれ親から聞いた話があると思いますが、この紙上ででもお聞かせていただければ有難いことと思つています。

平成十五年五月二十八日 記

参考 革命と青春（新日本出版社）  
十津川巡り（十津川村教育委員会）

以上三回に分けて親から聞いた十津川村の話を中心に書きま

したが、この他にもいろいろなことを聞いているのですがはつきりと思い出せません。父は私が二十才のとき、三才で、母は十三才のとき、五十二才で亡くなっています。今になつて、まだまだ色々なことを聞いておけばよかつたと後悔しています。

父は私が二十才のとき、六十

## 新十津川望郷会役員名簿

役職名	氏名	住所	電話番号	備考
顧問	小畠 茂一 松葉 孝文			町長 町議会議長
会長	山本 敬一郎			砂川支部会長
副会長	安田 麻夫 岡本 一郎 上杉 孝儀 丸谷 金保			郷友会顧問
理事	谷本 旭 前川 庄作 増谷 俊秀 玉堀 光夫 高棹 政義 高桑 和行 藪内 毅 岡田 功 柳沢 隆義 藪内 英之 杉村 修 辻本 弘道 谷口 次雄			郷友会中央会会長 郷友会中央会副会長 札幌郷友会会長 札幌花月会会長 さっぽろ大和会会長 さっぽろ吉野会会長 札幌郷友会事務局長
監査	上杉 天道 大久保 宗利			
事務局長	植田 満			助役
事務局次長	笹木 隆 佐川 純			教育長 総務課長

新十津川望郷会への連絡先《各種連絡、原稿送り先など》

〒073-1103 樽戸郡新十津川町字中央301番地1 新十津川町役場内 総務課長 佐川 純  
TEL 0125-76-2131 FAX 0125-76-2785

**投稿のお礼**

新十津川望郷会会報第六号を発行するにあたり、役員並びに会員の皆様には、ご投稿のご協力を賜わり、心からお礼申し上げます。来年の第七号の発行にあたり、多くのご投稿をお待ちしております。原稿用紙を送付させていただきままでの、事務局まで電話等でご請求くださいますようお願い申し上げます。

**新十津川望郷会会報 第六号**  
 発行 新十津川望郷会  
 〒073-1103  
 新十津川町字中央301番地1  
 新十津川町役場内  
 印刷  
 留萌印刷株式会社  
 〒077-10044  
 留萌市錦町一丁目  
 ☎ 0125-76-12231  
 事務局長(新十津川町助役) 植田 満  
 ☎ 0125-77-10044  
 0125-76-10342  
 二〇〇三年六月二十日発行